香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），28：23－33，2014

# 教育実践力を育むパペットシアターの芸術的展開

安東　恭一郎　・　青山　夕夏
（美術教育・幼児教育）　　（音楽教育）

760－8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部

# Artistic Development of Puppet Theater Cultivating an Educational Practice Power

Kyoichiro Ando and Yuka Aoyama

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要　旨**　本稿は，授業「児童文化」で学生がとり組んでいる人形劇と，香川大学サテライト活動として学生および音楽関連卒業生がとり組んでいるコンサート活動とを，「パペットシアター」として総合的に展開した活動に関する報告と考察である。

本企画は美術分野と音楽分野の教員が協働で行い，室内楽演奏を加えた人形劇の公演を行った。学生たちはこの活動を通して，音楽演奏と人形劇をそれぞれ個別に担当するにとどまらず，総合的で横断的な芸術活動を行うことができた。

キーワード　総合的芸術活動　協働　共同制作　創造性　人形劇

## １．はじめに

授業「児童文化」では「人形劇・演劇活動」学習内容とし，人形劇活動を行ってきた。

この取り組みは，授業内・学内だけに留まらず，地域幼稚園やさぬきこどもの国などで公演するなど活動範囲を広げてきた。さらに，2011年度からは，人形劇公演だけではなく，人形劇の幕間に子どもと一緒に歌う場面やゲームを取り入れるなど，さまざまな活動を取り入れ，子どもや保護者と共に過ごす充実した活動を展開できるようになった。

本稿は，2012年度学部研究開発プロジェクトの支援を受け，幼児教育領域と音楽教育領域の教員と音楽グループが協働して取り組んだ香川大学サテライト事業による「バレンタインコンサート」に取り組んだ活動を「協働」の観点から考察するものである。

本稿の前半では，その観点に基づき人形劇活動の取り組み全般を時間経緯によって示す。

そして本稿後半では，音楽演奏の観点から捉えた本事業の意義について提示することとした。

## ２．人形劇活動の取り組み活動の経緯

### （１）これまでの取り組み

授業「児童文化」に人形劇を取り入れたのは2010年度からであった。人形劇を授業の内容とした理由は「幼児教育実践場面において求められる力量は様々であるが，近年，支援者としての教育技術や知識の必要性と共に，支援者自身

が豊かな表現力を持つことが強く求められている」ことがあげられる。

本授業では，2010，11年の２年間，東かがわ市「とらまる座」研究員を非常勤講師として人形劇指導をお願いしてきた。また，2010年度以来３年間，香川大学フィールドワーク事業の一環として「とらまる座」を訪問し，舞台鑑賞とワークショップ参加を行うと共に，人形劇の成果発表も行ってきた。これらの取り組み過程及びその意義については既に述べてきた。

2012年度もこの活動を継続し発展させる予定であったが，必要となる予算の確保ができなかったり，「とらまる座」が県外に移動したりするなど諸般の理由により従前の授業運営ができなくなった。

### （２）新たな人形劇活動への展望

一方，2012度前期に，音楽領域の教員から「香川大学・サテライト事業」で取り組んでいる「こどものためのコンサート」で人形劇を併せて公開することができないか，との打診を受けた。

「こどもと楽しむコンサート」は，紙芝居や演劇などのパフォーマンスを取り入れ，音楽教員（青山教員）を中心として，音楽領域・吹奏楽団所属の在校生や卒業生，修了生（音楽教師）などが協力しあって展開していた。この活動は音楽活動を大学内の授業や学校教育の中の音楽、音楽関係者にとどめず，地域や子どもたちが音楽に親しむ機会を積極的につくっていくことを願い，展開しようとするものである。

この企画に参加し人形劇を実施する場合，サテライトまでの交通費は大学側の負担となる。また，劇場は受け入れ側の自治体が提供するなど，人形劇公開で必要としていた経費が確保でき，当初予定していた「人形劇の公開公演」が可能になることがわかった。

### （３）新たな人形劇活動の課題

他方，新たに室内楽を伴う人形劇を実施する場合，集客を300人から400人ほどを予定（９月に実施された三豊公演では300名ほどの集客であった）していることから，これまで実施してきた「指人形」では舞台も人形も小型で適応できず，新たに公開規模に見合った舞台と大型の人形が必要となることなどが課題となった。

さらに，2012年度以降は，従前のような学外の専門家による支援を得ることができなくなったので，新たな人形劇支援の体制作りが必要となった。また人形劇活動では利用する人形制作費や場面毎の舞台用具制作などに相当の費用がかかるので，外部資金による支援が必要であった。このような事情により，これまで積み上げてきた人形劇活動を引き継ぎながら，新たな支援体制の構築や授業構成の再編が求められた。

## ３．本事業の独自性

### （１）対象となる活動

本稿の対象となる活動は，授業「児童文化」で学生（当該年度受講生は全て幼児コース学生であった）がとり組んでいる人形劇と，香川大学サテライト活動として学生および卒業生・修了生がとり組んでいるコンサート活動とを，「パペットシアター」として総合した活動全体とした。

「児童文化･人形劇活動」は美術･安東教員が，「サテライト・音楽活動」は音楽・青山教員が主として担当した。

この企画の独自性は，音楽演奏会や人形劇をそれぞれ個別に行うのではなく，総合的に一つの場面を創っていくことにある。本企画では美術分野と音楽分野の教員が共同して学生を支援するものであり，学生たちはこの活動を通して，一つの領域に留まらない総合的で横断的な芸術活動を体験し実現していくことが期待された。

このような総合的な活動は，専門的な領域が複合する教育学部だからこそ実現できる学部固有の取り組みであり，その成果を地域に還元できることを願い事業として企画した。

### （２）本事業における発表場面の設定

音楽と人形劇とを総合する活動を進めていく

にあたり，まずその発表場面を想定し，その場面に向かって活動を展開することとした。

そこで，これまでのコンサートと朗読を組み合わせたサテライト事業をベースとした。H24年度９月の当該サテライト事業は三豊市で公開されており，そこでは３つの曲目（「ピーターとおおかみ」「ヘンゼルとグレーテル」「シンデレラ」）が絵本の映写と朗読などによって取り組まれていた。

本事業ではその中の「シンデレラ」をH25年２月東かがわ市で「バレンタインコンサート」として取り組むこととした。その理由はこれ以外に新たな曲目を選ぶより，既に実施されている取り組み状況を参照しながら人形劇を構想する方がイメージしやすいからであった。そして，「シンデレラ」を選定した理由は，「ヘンゼルとグレーテル」は既に演技を加えた活動をしていたこと，そして，３つの曲目の中で一番よく知られた話であること，それによって初めて演技する学生たちにとって練習の付加を軽減し，人形劇活動に余裕ができると判断したからである。

学生たちはこの人形劇活動に先立ち，まず人形劇活動のイメージを得るため，フィールドワーク事業を利用して「とらまる座」を訪問した。ここでは，とらまる座研究員の案内で人形劇の実演を見学したり，ワークショップによる簡単な人形制作などを一日体験した。

## ４．人形劇準備段階における協働

### （１）台本制作時における課題の提示

人形劇活動では，脚本を基にして演劇活動や人形制作などを行っていく。本活動では，まず「シンデレラ脚本制作」に取り組むため，これまでこのサテライトコンサートで使用されてきたシンデレラの絵本を参考にしながら，脚本を制作していった。そして，この制作過程で，これを実際に演技するのに必要となる人形や大道具，小道具なども提示していった。この過程で，シンデレラを人形劇として演じてくためには，貧しい格好をした人形と舞踏会に参加する人形とを共有することが困難なことがわかり，最初に想定していた人形の数の二倍必要となることとなった。

しかし，この人形劇は大型人形（マリオネット・身長70センチ程度）を利用することが予定されており，一体あたりの単価が高価であったので，想定していた二倍の人形をそろえることはできなかった。

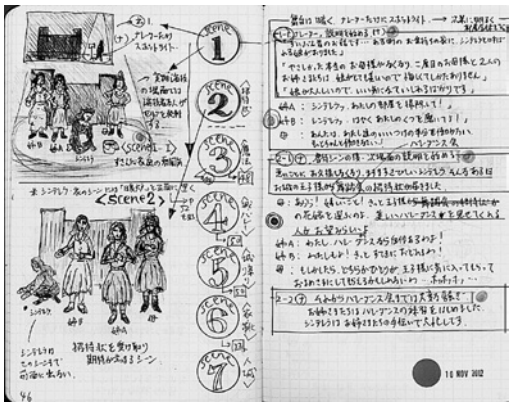
そこで，この人形劇を「人形と人間」の演出による演劇として構想することとした。すわち，人形の利用はシンデレラのハイライトシーンである舞踏会のシーンで用い，貧しい格好をしたシンデレラのシーンは登場人物全てが人間で演じることとした。

＜図１：台本を読み合って，イメージを共有していく＞

### （２）学生と教員との協働

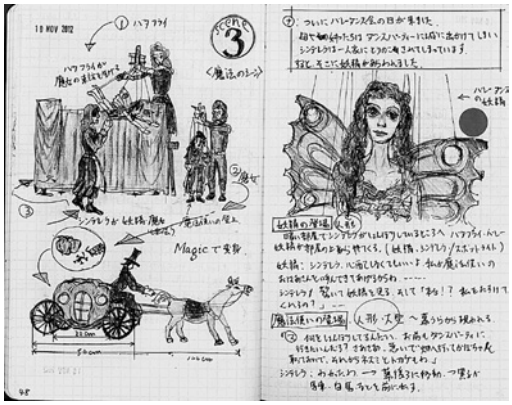
このようにして人形と人間との共演によって展開することにして，脚本を制作していくことになったが，次の課題は各シーンのイメージをどのように演出者全員が共有していくか，ということであった。演劇の場合，絵コンテなどで視覚イメージを提示することが多いが，初めて脚本を制作する学生にとってそれを視覚的にイメージし，絵コンテとする作業を求めるのは困難と判断し，各場面のイメージについては教員が脚本に基づき提示することとした。

その場面イメージは以下の図で示したものである。実際にはこの絵図のそれぞれについて詳細なコメントによって説明を加え，イメージをより具体的に共有できるようにした。



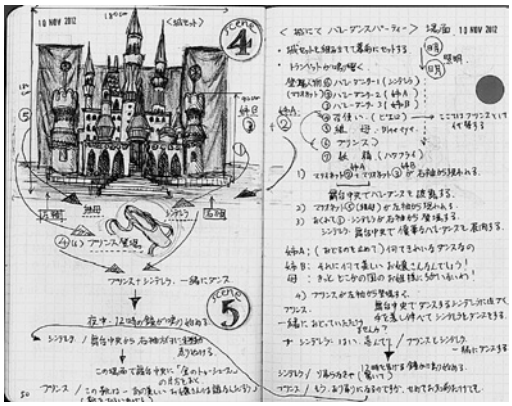
<図２：始まりのシーン>

図２では，この人形劇は全体で７場面から構成されていることを示し，舞台のイメージを提示している。ここでは，実際に人間が演じることを想定したイラストとなっている。



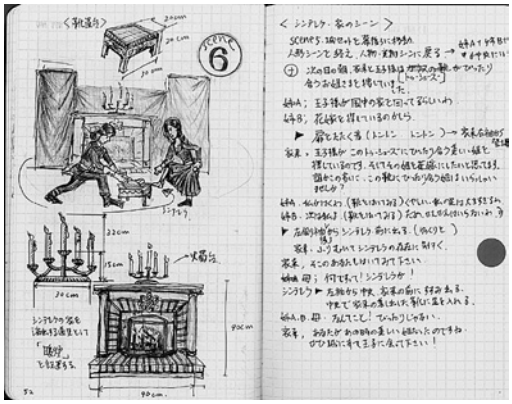
<図３：魔女とカボチャの馬車，変身のシーン>

図３は，人間から人形へと出演者が移行するシーンである。実際の演劇では，馬車が現れるシーンでドライアイスを用いて効果をつけた。



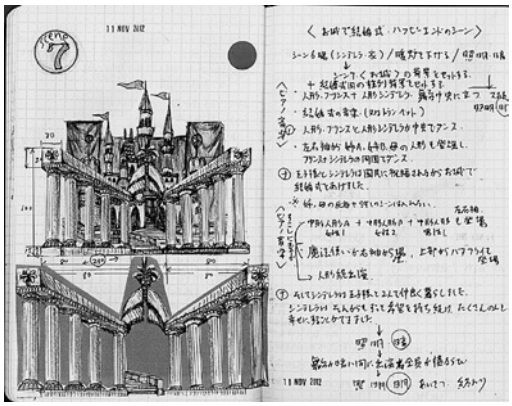
<図４：ダンスパーティーの城，金の靴>

ダンスを行う舞踏会会場はシンデレラのハイライトシーンである。小道具も大きなものを準備した。この城の前で，学生はマリオネットを操作して，バレーシーンを演じた。使用する大型マリオネットが総出演して場面を盛り上げた。



<図５：シンデレラの家を訪問するシーン>

図５は，シンデレラの家のシーンである。家であることを示すために，シンプルに暖炉と燭台だけでその雰囲気を現すこととした。



＜図６：結構式の会場シーン＞

図６は，最終場面で再び城に帰り，シンデレラと王子が結婚する場面で，城の前に列柱を配置することでより荘厳な雰囲気を出すこととした。

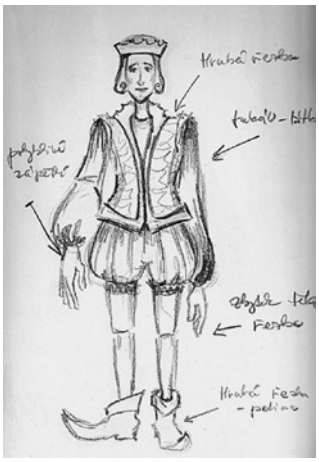
学生たちはこの提示されたイメージを基に大道具，小道具の制作活動を行い，その過程を通して少しずつ演技のイメージも形成していった。

こうして，おおよその全体像と舞台イメージを形成した頃に，注文していた大型マリオネットが届き（全てチェコスロバキアに発注し，注文リストにない人形については特注した），マリオネット操作の練習も併せて行った。

## ５．マリオネット制作における協働

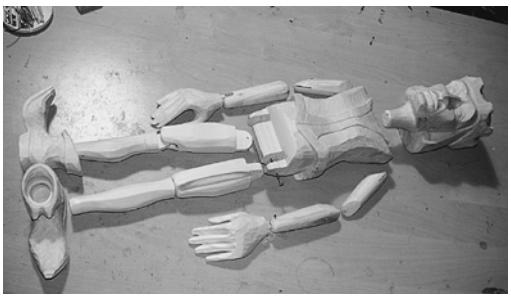
この劇の最大の特徴は，人間とマリオネットが配役を共有することであった。実際の演技場面では，人間とマリオネットが同一人物であることがわかるような演出が必要となる。シンデレラのように人物から人形に移行する場面で衣裳が大きく替わるような場合，人物衣裳と人形衣裳が大きく変わることが許容され（貧しい衣裳から，舞踏パーティー用衣裳への転換），人形と人物との関連性は，場面転換の演出によって説明できる。

一方，今回の演劇準備で最大の課題となったのは，プリンスを演じる人形と人物との衣裳を連続させる必要があり，この連続性の実現に



ついてであった。また，マリオネットを発注する際，人形工房で準備された人形リストにプリンスに相当する人形がないことがわかり，特注でマリオネット制作を依頼することが必要となった。

今回マリオネットを発注した人形工房はチェコスロバキア・プラハにあり，遠方であったがメールを利用した意見交換を何度も繰り返した。



この工房に現在の取り組みと特注の人形が必要となる事情を説明して，理解していただき，値段と納期の交渉をした後，相互にプリンスのイメージを出し合い，協働してプリンスのマリオネットを依頼し，制作していただいた（写真参照）。

特注での制作となったので，予定していた納期が大幅に遅れ，完成品が到着したのは年をまたいだ１月になってからであった。その間，プリンスを使った人形劇練習をすることができなかったので，演劇練習では代替する人形を用いて練習を繰り返した。人物が実際に着衣するプリンスの衣裳については，プリンス人形のスケッチイメージを送付していただき，学生がそれを参照して縫製して人形と同様の衣裳を作成した（人物・シンデレラとプリンスが並ぶ写真を参照）。

このようにして，人形と小道具・大道具，衣裳などが全て揃ったのは，公演の１ヶ月前の１月半ばで有り，ここから学生の自主的な練習が連日繰り返され，徐々にその姿を現していった。この演劇に音楽を合わせることができたのは公開直前であり，この大がかりなシンデレラ劇は学生の大変な努力によって公開当日に間に合うことができた。

## ６．人形劇の公開

このようにして予定していた，2013年２月９日に東かがわ市，香川大学サテライト事業「バレンタインコンサート」が開催され，当日は幸い体調不良などで欠席する学生もなく，計画通り公演を実施することができた。

午後の公演に備えて，会場には午前から入り，実際にステージに立ち，大道具・小道具の

＜シンデレラが魔女と話すシーン＞

＜シンデレラが馬車で舞踏会に向かうシーン＞

＜舞踏会で王子とダンスをするシーン＞

＜執事が靴を併せるシーン＞

設営場所の確認，証明の打ち合わせ，音響の確認調整などを行った後，ようやく通し稽古ができた。非常に短い時間設定の中でこのような準備を行い，公開直前まで全く余裕はなかった。そして，400名近くの来場者を得て舞台が公開された。

学生たちにとって，台本制作をすること，台本からイメージを共有して衣裳や舞台道具を制作すること，演劇をすること，マリオネットを操作すること，音楽劇として演技を併せていくこと，そして400名もの来場者を前に演技をすることなど，全てが生まれて初めての経験であった。

舞台に立つと，自分たちは照明に照らし出されるので来場者の表情を見ることはできず，ただこれまで繰り返してきた練習の成果をこの一回だけの舞台に向けて全力を出し切ることだけに集中した。

そして，その成果を学生たちは存分に示すことができ，最後のシーンでは会場から大きな拍手を得ることができた。

## ７．人形劇活動の課題

人形劇を構想し，公開するまでの半年間，学生たちにとって，全てが未知の経験である上に，授業指導者自身もこれまでに指導した経験のない演劇指導となった。

明確な指導計画を立てることができないまま最初の段階で大枠だけ決めて，授業を開始し，途中で何度も計画を変更したり，衣裳や舞台道具の再調整をしたりを繰り返した。

そのため，学生にとっては未知の体験であるだけではなく，指導者から明確な方向性を与えられることがなく，舞台道具が全て揃ったのが公開一ヶ月前となるなど，不安要素ばかりの中で練習を繰り返すこととなった。

また，この企画は音楽領域との合同の演出を予定していたので，音楽との演出を調整していく必要があった。音楽との演出，協働については本稿の後半で扱う。

本事業の公開が結果的には多くの来場者を得て，多くの方に感動を与えたことは，当日の会場にいた者は誰もが確信できたと思われる。一方で，今回の事業を今後継続していくためには，再考するべき課題が多くある。

その幾つかを端的に示すことで，本稿の前半部分のまとめとしたい。

- 授業時間内でできる演劇の規模を検討する（今回の演劇では通常授業時間内に納めることができず，３倍以上の準備時間が必要であった）。
- 演劇するグループ人数の検討をする（今回

は12名が１グループを形成したが，練習時において常時12名が揃うことが困難で，欠席者がいると練習ができない。また事情があって欠席する学生に精神的負担をかける)。

・　十分な予算の確保が必要（舞台装置を制作したり，舞台衣裳を準備したりするためには想定外の費用がかかる。また練習を繰り返す中で舞台装置が壊れて修理することも計算に入れる必要がある。衣裳についても演劇終了後のクリーニング代金も準備しておく必要がある)。

・　演劇内容と出演者の個性をよく吟味しておく必要がある（今回の演劇はシンデレラであり，この物語で気持ちのよい役回りはシンデレラとプリンスと魔女くらい。あとは意地悪で地味な役回りとなる。この気分がよくない役回りを何十回も練習するのは精神的負担が予想以上に大きい)

・　今回の人形劇活動では物語設定や人形が学生の意志決定によるものではなく，与えられたものをいかによりよく演技するか，が課題として与えられた。学生にとっては必然性のない課題で有り，このことが終始演劇のモチベーションに影響した。今後は学生自身が意志決定した内容と演劇構成で展開することが望ましい。

## ８．香川大学サテライトオフィスでの音楽活動の展開

香川大学は大学のもつ教育・研究の推進，産業・文化の活性化や発展，人材の育成や交流を図ることを目的として香川県内の市町村と連携協力協定を結んでいる。平成24年度に，３市およびその周辺地域との密接な連携をはかるためにサテライトオフィスが開設された。いずれも各市にある既存の公共施設を活用しての設置である。

サテライトオフィス開設前に，その運用に関する市民を対象としたアンケート調査が行われたが，コンサート等の音楽活動への要望が多く寄せられた。地方の中核都市から距離的に少し離れると，身近に音楽に触れる機会が得にくいという現状がある。また周知のように，多くの地方自治体では公共施設建設後の運用方法が大きな課題ともなっている。サテライトオフィスでの音楽活動の可能性としては様々あると考えられたが，まず初年度の取り組みとして「こどもを対象とする音楽鑑賞の機会」の実施を決めた。サテライトコンサートシリーズ「こどものためのコンサート」「こどもと楽しむコンサート」のタイトルで，（１）平成24年９月５日（土）三豊市サテライトオフィス，（２）平成25年２月９日（土）東かがわサテライトオフィスの２か所で開催することとした（図７，図８)。各サテライトコンサートのサブテーマは，（１）「３つのお話」，（２)「バレンタインコンサート」である。（１）（２）ともに演奏曲目は，「ピーターとおおかみ」，「ヘンゼルとグレーテル」，「シンデレラ」で上演した。以下，本論文で主に取り上げるのは，（２）の「シンデレラ」である。

２ヶ所のサテライト会場では想定される対象者はほぼ同じ（保護者と園児・児童）だが，附帯設備，会場の大きさには違いがある。音楽，人形劇ともに，当然，その違いを考えに入れて上演する必要がある。中でも最も考慮する必要があったのは会場の広さ(収容人員の差)であった。（１）の会場が280名の定員に対し，（２）の会場では450名が想定された。（１）の「シンデレラ」公演はピアノ独奏と読み聞かせという形であったが，（２）ではフルート，ソプラノサクソフォーン，クラリネット，ファゴット，ホルン，ピアノにそれ以外の楽器を組み合わせることで演奏を構成することにした。（１）では安東が，照明・効果音・撮影担当，青山が演奏・監修として参加し，その記録は（２）の授業や公演の参考資料として活用した。

今回は，人形劇・演劇グループと演奏グループの２つのグループが共同で活動する。まず，台詞作成に先立って（１）の公演で参考にした様々な種類の「シンデレラ」の資料を学生に提示し，台詞の検討作業と作成は児童文化の授業の中でおこなった。台詞が完成したところで，

＜図７：チラシ表＞

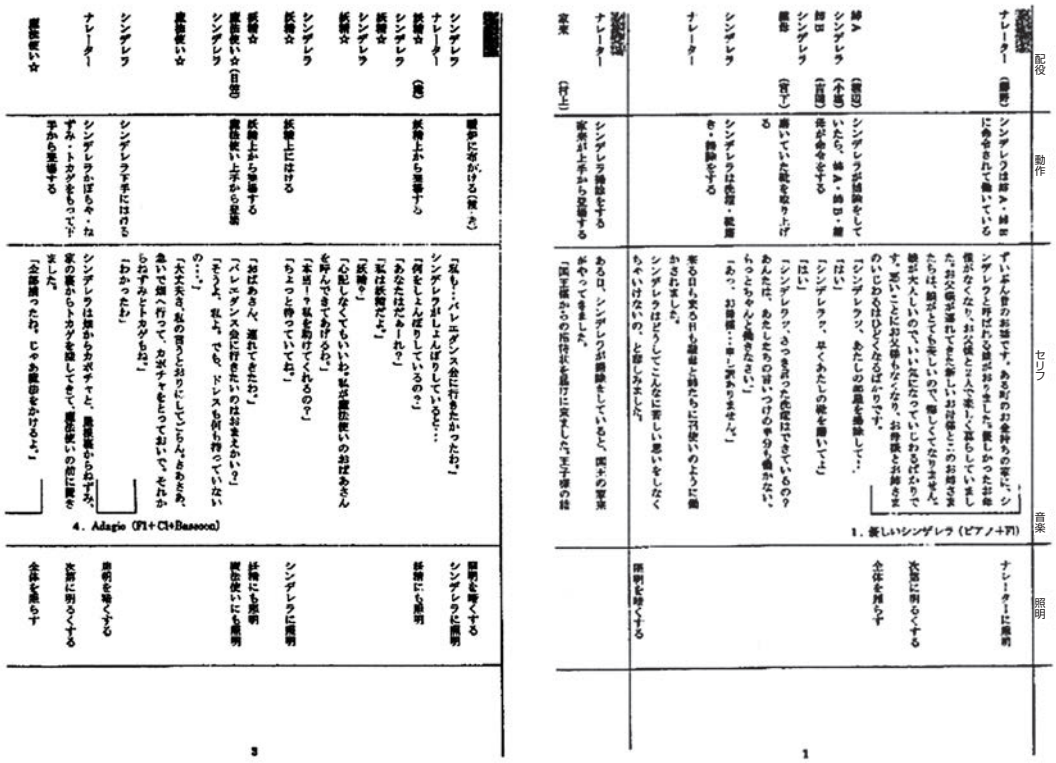
＜図８：チラシ裏＞

前回のビデオを参考に修正点を抽出し，音楽を担当する学生（幼児教育と音楽領域の学生）が協力して検討を重ねて以下の２点を決定した。すなわち，どの場面にどのような楽曲を演奏するのが最適かという点と，その楽曲を台詞や言葉のどのタイミングに入れるのが最適かという点である。特に前回の反省を踏まえた点は効果音である。たとえばシンデレラの鐘の音は，（１）ではヨーロッパの教会の鐘の収録音をマイクを通して流したが，（２）ではチューブラー・ベルによる実音で行うことになった。また，全員が一斉に集まる機会は限られるため，その限られた時間内で完成させるためには，台本の構成にも配慮が必要であると考えた。とりわけ演奏グループが台本を一目見れば，全体の動きや自らの役割が理解できるようなものでなければならない。当初，人形劇・演劇グループが作成した台本には人形の動きのみが記入されていたが，照明，曲目，音楽の入るタイミングと音楽の終了など，舞台進行のほぼすべての要素が一目瞭然にわかるものが必要となった。そのため，それらを書き入れた台本をあらためて作成した（図９）。

演奏形態は少人数の室内楽のため，ふつうであれば指揮者を必要としない。しかし，限られた全体練習で本番の舞台をスムーズに進行させるためには，全体の舞台進行を見ながら音楽の進行（演奏位置や音楽のスタート等）を演奏者に的確に指示できる指揮者（プロンプター）を置くことが必要とされた。指揮者の指示内容の確認は事前に何度も行なった。その結果，会場での通し練習は当日のみだったが，舞台と音楽の流れはスムーズだった。満席で立ち見の出る450名ほどの来場者に恵まれ，アンケート結果（図10）からも大変喜んでいただいたことがわかる。東かがわ市担当者からは再演の要望を重ねて受けている。

全体を振り返って，いくつかの点について述べたい。

今回，上演までのプロセスは，音楽と演劇という異なる要素から成る二つのグループを組み合わせて人形劇を完成に近づけるという体験で

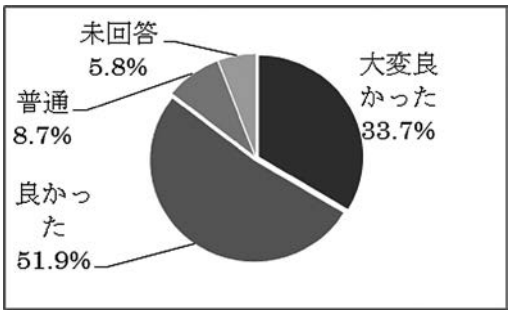


＜図９：台本＞

ある。演奏を担当したグループは，音楽研究室の学生，大学院生，修了生（現職教員）と，他所属の演奏技能に優れた本学学生との集合体で，演奏経験も多く，場数を踏んで鍛えられているメンバーで構成された。他学部学生や既卒者など外部の演奏者も重要な役割を果たしている。音楽研究室の在籍生だけでは専門的に演奏できる楽器の種類も多くないため，こうした機会に様々な演奏者と共演，交流ができることは魅力的で，音楽研究室の学生には大きな刺激となっている。また異なった立場（研究室，学部，さらに大学の枠を越えた）のメンバーが一つのことを作り上げ，それを学外での活動とする過程では，予期せぬ行き違いや思惑の違いも発生する。一例として，演奏担当の学生が，「児童文化」と直接の打ち合わせや連絡を行いつつ調整を進めることは苦労も少なくなかったはずである。ここでは具体的に述べることはできないが，その点では意義深い経験になったこ

＜図10：[質問]今回の公演は，いかがでしたか？＞

| | 人数 | 割合 |
|---|---|---|
| 大変良かった | 35 | 33.7 % |
| 良かった | 54 | 51.9 % |
| 普通 | 9 | 8.7 % |
| あまり良くなかった | 0 | 0 |
| 良くなかった | 0 | 0 |
| 未回答 | 6 | 5.8 % |
| 総計 | 104 | 100 % |



［開演前］　舞台の準備を行う学生

受付担当の学生

＜図11＞

とは間違いない。

次に，全体の時間設定についての問題である。音楽担当グループは学外者の参加もあり，履修時間内に練習時間を設定することがむずかしい。今回，さまざまな不確定要因が重なる状況が生じたが，一般的に言っても未然に予期せぬ事態の発生は避けがたい。しかし，市民に対して大きな責任を負う行事であり，前もってそれを見越した計画の立案は不可欠である。また，学生に対して社会的責任の自覚を促す必要もある。そして必要な練習時間ともかかわる点であるが，技能や経験を要する担当者の人選をどのように進めていくのかも課題となる。

最後に，継続性の問題である。このような企画の場合，初回を立ち上げるのには様々な苦労を伴う。しかし，それを乗り越えることができたとしても，その後，これをどのような形で継続させていくかが課題となる。今回，公演当日には幼児教育をはじめとする下級生を中心とした多くの在校生の協力があり，それがあってはじめて公演が成立した（図11）。一人一人の学生に則して言えば，サポートする側とされる側の両方を経験できるようなプログラムであることがのぞましい。その意味でも，継続して進めていくことに大きな意義がある。そのためには，今後，どのように時間と必要経費を確保していくのかが大きな課題である。

謝辞

本実践とその研究にあたり学部研究開発（新規 2012－2013年）「教育実践力を育むパペットシアターの芸術的展開」および，平成24年度学長戦略調整費（新規　2012－2013年）「人形劇活動の充実と展開のためのフィールドワーク」の支援を得た。